

# 「資本の運動には際限がない」 —「論理的構文論」による『資本論』読解—

川 崎 誠

## 1. はじめに

『資本論』第1巻第4章「貨幣の資本への転化」第1節「資本の一般的定式」は、これを「論理的構文論」<sup>(1)</sup>の立場から読み解くと、『大論理学』本質論現実性編の第1章「絶対的なもの」「A絶対的なものの開陳」の論理展開に対応するとみられる。ただし対応関係は一様でなく、同節の多くのパラグラフは『大論理学』との一文対一文対応を基本に読むことができるが、一部には『大論理学』の短い文に『資本論』の長いパラグラフが対応するというケースも見られる。一文対一文の例として1パラグラフを挙げてみよう（①等はパラグラフ内での文の番号）<sup>(2)</sup>。

### <資> 1パラグラフ

①商品流通は資本の出発点である。Die Waarencirkulation ist der Ausgangspunkt des Kapitals. ②商品生産、および発達した商品流通 — 商業 — は、資本が成立する歴史的前提をなす。Waarenproduktion und entwickelte Waarencirkulation, Handel, bilden die historischen Voraussetzungen, unter denen es entsteht. ③世界商業および世界市場は、一六世紀に資本の近代的生活史を開く。Welthandel und Weltmarkt eröffnen im 16. Jahrhundert die moderne Lebensgeschichte des Kapitals.

これは「資本の一般的定式」節の冒頭であるから、対応する『大論理学』の叙述も「絶対的なもの」章「A絶対的なものの開陳」の始まりである。

### <大> 1パラグラフ 第1文～第3文

①絶対的なものは存在であるばかりでなく、また本質でもある。Das Absolute ist nicht nur das Sein, noch auch das Wesen. ②前者は最初の反省していない直接態であり、後者は反省した直接態である Jene ist die erste unreflektierte Unmittelbarkeit, diese die reflektierte; ③さらにそれぞれが自分自身のもとで総体性であるが、しかし一つの規定された総体性である。jedes ist ferner Totalität an ihm selbst, aber eine bestimmte.

第1文どうしの対応から始めよう。「存在」と「本質」との関係について『大論理学』は次のように説いている。

<大> 存在は直接的なものである。知は、真なるものを・すなわち存在がそれ自体で自立的にあるところのものを認識しようとするのであるから、直接的なものとその諸規定のもとに立ちとどまってはしないで、この直接的なものの〔の領域〕をつき破ってそのむこうにでるのであるが、それは、この存在の背後になお存在そのものとはこと

なった或るものが存在しており・この背後にあるものが存在の真理態をつくりなしているということを前提して「そうするのである」。この認識は媒介された知である、というのは、この認識は直接に本質のもとに・また本質のなかにみいだされるのではなくて、「本質にとっての」或る他者・すなわち存在から出発して、或る予備的な道を・すなわち存在をこえ出る運動あるいはむしろ存在へと入りこむ運動をなしている道を歩まなければならないからである。(2p.15)

「真なるもの」であるところの「存在がそれ自体で自立的にあるところのもの was das Sein an und für sich ist」は存在の本質である。そして「真なるもの」は「絶対的なもの」でもある。ゆえに「絶対的なものは存在であるばかりでなく、また本質でもある」。さて真なるものの「認識は「本質にとっての」或る他者・すなわち存在から出発する beginnt von einem Anderen, dem Sein」。つまり「存在は本質の出発点である」。これは無論『資本論』での「商品流通は資本の出発点である」に相当する。

次に第2文である。「最初の反省していない直接態」は「反省した直接態」が「それのもとで成立する unter denen es entsteht」ところの「前提をなす」。つまり「商品生産、および発達した商品流通 — 商業 —」が「最初の反省していない直接態」であるのに対して、「資本」は「反省した直接態」なのである。

第3文どうしの対応はいささか分かりにくいだが、それでも「絶対的なもの」章の注解「スピノザの哲学とライプニッツの哲学」を参照することで理解は容易になる。すなわち「モナド」は「総体性が分散させられた完全性として現存する」(2p.231) ところの現実存在 Existenz (直接態) だが、ヘーゲルはここで「最初の反省し

ていない直接態」と「反省した直接態」をモナドとして把握する。つまり二つの直接態もまた「(直接態の) 総体性が分散させられた完全性 eine zerstreute Vollständigkeit として現存する」、ゆえに「それぞれが自分自身のもとで (分散させられた完全性として現存する) 総体性であるが、しかし (反省していない・反省した、というように) 一つの規定された総体性である」と説かれたのである。同様に『資本論』でも、「商品生産、および発達した商品流通」(最初の反省していない直接態) と「成立した資本」(反省した直接態) のそれぞれは「一つの規定された総体性」である — 16世紀をはさんで前後それぞれの富 —。そして前者が後者を「開く」と謂われるが、この「開く eröffnen」は無論モナドの「固有の行い」(2 p.232) たる「開示する運動 das Offenbaren」(同) であり、「開示」(Offenbarung) は「開陳」(Auslegung) と同じ意味である。つまり注解の叙述「モナドにおける諸変化と諸規定はモナド自身におけるその顕現である」(同) に準えて言えば「商品流通における諸変化と諸規定が商品流通自身におけるその顕現であって」、別言して「世界商業および世界市場は、16世紀に資本の近代的生活史を開く」、これである — ‘Manifestation’ と ‘Offenbarung’ は類語 — <sup>(3)</sup>。

## 2. 18パラグラフ第1文の読解

このように『資本論』の『大論理学』との対応関係が比較的シンプルなパラグラフはその論理の展開も把握しやすい。これに対して「資本の一般的定式」節中もっとも対応関係の見えにくいのは18パラグラフである。同パラグラフは全部で17箇の文から成る、「資本の一般的定式」節で最も長いパラグラフである。パラグラフの中核をなす論点に関する限りは、『大論理

学』との論理的な対応も分からないではない。けれども周辺をなす叙述についてはそれが如何なる論理のもとに叙されているのか、論理的構文論に立って把握しようとしても、『大論理学』の簡潔な叙述から得られる情報は少ない。18パラグラフが直接対応する「A絶対的なものの開陳」の叙述は、『資本論』とは対照的に短いからである。そこで勢い『大論理学』—すなわち「A絶対的なものの開陳」—との直接的な対応を離れ、論理の展開を示唆する別の手がかりが『資本論』に求められることになる。以下読解の実際を具体的に示してみよう。

はじめに「資本の一般的定式」節18パラグラフとそれに直接対応する『大論理学』の叙述—「A絶対的なものの開陳」6パラグラフ第5文—を挙げておく。

#### ＜資＞ 18パラグラフ

①買うための販売の反復または更新は、この過程そのものと同じく、この過程の外にある究極目的、消費に、すなわち特定の諸欲求の充足に、その限度と目的とを見いだす。②これに反して、販売のための購買では、始まりも終わりも同じもの、貨幣、交換価値であり、そしてすでにこのことによって、その運動は無限である。③確かに、 $G$ が $G + \Delta G$ になり、100ポンド・スターリングが100プラス10ポンド・スターリングになってはいる。④しかし、単に質的に考察すれば、110ポンド・スターリングは100ポンド・スターリングと同じもの、すなわち貨幣である。⑤また量的に考察しても、110ポンド・スターリングは、100ポンド・スターリングと同じようにある限定された価値額である。⑥もし110ポンド・スターリングが貨幣として支出されるとすれば、それは自分の役割を捨てることにな

るであろう。⑦それは資本であることをやめるであろう。⑧もし流通から引きあげられれば、それは蓄蔵貨幣に石化して、最後の審判の日まで蓄え続けられてもびた一文もふえはしない。⑨ひとたび価値の増殖なるものが問題となれば、増殖の欲求は、110ポンド・スターリングの場合も100ポンド・スターリングの場合と同じである。⑩というのは、両者ともに交換価値の限定された表現であり、したがって両者ともに、大きさの増大によって富自体に近づくという同じ使命をもつからである。⑪確かに、最初に前貸しされた価値である100ポンド・スターリングは、流通においてその価値につけ加えられる10ポンド・スターリングの剰余価値から一瞬のあいだ区別されはするが、しかしこの区別はすぐまた消えてなくなる。⑫過程の終わりには、一方の側に100ポンド・スターリングというもとの価値が、そして他方の側には10ポンド・スターリングという剰余価値が出てくる、というわけではない。⑬出てくるのは、110ポンド・スターリングという一つの価値であって、それは、最初の100ポンド・スターリングと同じく、まったく価値増殖過程を開始するのに適した形態にある。⑭運動の終わりには、貨幣がふたたび運動の始まりとして出てくる。⑮それゆえ、販売のための購買が行なわれる各個の循環の終わりには、おのずから新たな循環の始まりをなす。⑯単純な商品流通—購買のための販売—は、流通の外にある究極目的、すなわち使用価値の取得、欲求の充足、のための手段として役立つ。⑰これに反して、資本としての貨幣の流通は自己目的である。というのは、価値の増殖は、この絶えず更新される運動の内部にのみ実存するからで

ある。それゆえ、資本の運動には際限がない。

<大> A 絶対的なものの開陳 6 パラグラフ 第5文

— それだから絶対的なものを開陳するあの運動だけでなく、ひたすらそのものとへと到達したこの絶対的なもののそのものもまた不完全なものである。

ここで『大論理学』の説く論理が理解されれば、『資本論』18パラグラフについても同一論理の説かれていることは、その中核的な論点に関する限り比較的容易に分かる。詳しくは後に述べるが、18パラグラフの要点は最終第17文「それゆえ、資本（絶対的なもの）の運動には際限がない」であり、「際限のない」ものはそのことゆえに「不完全なもの」なのである — 絶対的なものも、したがっていまだ展開されていない「絶対的なもののそのもの」である —。このように両テキストの対応に問題はない。

ただ『資本論』で第17文に先立つ16箇の文があるというのは、『大論理学』の叙述に比してアンバランスの感が否めない。そこでそのような構成に到った理由を、そこに説かれる論理に焦点を当てて考えてみる。第1文から順に見ていこう。

(1)

<資> 第1節資本の一般的定式 18パラグラフ 第1文

買うための販売の反復または更新は、この過程そのものと同じく、この過程の外にある究極目的、消費に、すなわち特定の諸欲求の充足に、その限度と目的とを見いだす。Die Wiederholung oder Erneuerung der

Verkaufs um zu kaufen findet, wie dieser Proceß selbst, Maß und Ziel an einem außer ihm liegenden Endzwecke, der Konsumtion, der Befriedigung bestimmter Bedürfnisse

筆者の見立てでは、『資本論』18パラグラフは『大論理学』A版「C 没度量的なもの」 — 詳しくは存在論度量編第2章「独立した度量の比」の「C 没度量的なもの」 — に対応する<sup>(4)</sup>。パラグラフの要点をなす第17文「それゆえ、資本の運動には際限がない Die Bewegung des Kapitals ist daher maßlos」の 'maßlos' は、『大論理学』のカテゴリーとしては「没度量的なもの das Maßlose」 — すなわち「度量の無限性 die Unendlichkeit des Maßes」(1 p.336) — だからである。ただし「C 没度量的なもの」のうち18パラグラフと直接に対応するのは1・2パラグラフに限られ、まず1パラグラフが18パラグラフ第1文だけに対応する。

<大> C 没度量的なもの 1パラグラフ

①度量は直接的定量の外面性と無関心性とに抵抗しかつこれに対して自己を維持する本来的に存在する大きさである。Das Maß ist an sich seiende Größe, welche der Äußerlichkeit und Gleichgültigkeit des unmittelbaren Quantums widersteht und sich dagegen erhält. ②だが特有の度量のこの無関心的な独立態は量的区別に基づいており、そしてそのゆえにもろもろの比がその上で変化する定量の度盛りにそって上昇または下降することができる Diese gleichgültige Selbstständigkeit der spezifischen Maße aber beruht auf dem quantitativen Unterschied und ist darum des Auf- und Absteigens an der Skala des Quantums fähig, auf welcher die Verhältnisse sich ändern; ③或るものないしは質は自己

をこえ出で没<sup>・</sup>度<sup>・</sup>量<sup>・</sup>的<sup>・</sup>な<sup>・</sup>もの<sup>・</sup>へと追いやられ、  
その定量のたんなる変化を通じて没落する。  
Etwas oder eine Qualität wird über sich  
hinaus in das Maßlose getrieben und geht  
durch die bloße Änderung seines Quantums  
zugrunde. ④大きさは無関心的な外的性状  
であって、この性状のもとに定在はとられ、  
かつこの性状によって破壊されることが  
ありうるのである。Die Größe ist die  
gleichgültige äußerliche Beschaffenheit, an  
der ein Dasein engriffen und wodurch es zerstört  
werden kann.

『大論理学』におけるキーワードの一つである  
‘Verhältnis’の訳語「比」については、あらか  
じめ以文社版訳者（寺沢恒信）の注 ― 量論  
におけるものだが ― を参照しておくのがよ  
からう。

〔ここでは〕事柄の内容に即していえば  
「比」というよりも「相関関係」と訳すべ  
きであるが、それでは本文に述べられたこ  
ととの連関がつかなくなるので、無理を承  
知でこう訳した。要するに、ドイツ語でい  
えば無理のないことが、日本語に訳すと、  
どう訳しても無理になる。日本語では「比」  
＝「相関」ではないから。(1 p.451 訳者注  
51)

さて「買うための販売」はW－G－Wだが、  
その「反復または更新」は『大論理学』①に謂  
う「度量」である。というのは「買うための販  
売の反復または更新は、この過程そのものと同  
じ」であり、すると「この過程そのもの」は  
「(反復・更新なる)外面性と無関心性とに抵抗  
しかつこれに対して自己を維持する(同じ)本  
来的に存在する大きさ」(②「特有の度量」)だ

からである ― 言語事実を考えるとイメージ  
しやすいかもしれない。私は生まれてこの方  
「さようなら」を何万回と発してきた。それら  
は声の大きさ・調子等実にさまざまであるが、  
すべて別れの挨拶である―。

そして ― 原書の語順にしたがって ― 「買  
うための販売の反復または更新は、その限度と  
目的とをこの過程の外にある究極目的に見いだ  
す」。けれども「度量(限度) Maß」 ― いま  
「買うための販売の反復または更新」がそれだ  
である ― が「この過程の外にある」というの  
だから②「特有の度量」は「無関心的な独立  
態」であり、それは「量的区別に基づいており、  
そしてそのゆえにもろもろの比[相関]がその  
上で変化する定量の度盛りにそって上昇しまた  
下降することができる」。かつまた「その目的」  
が「この過程の外にある」のだから、その「反  
復または更新」において「買うための販売」  
(或るもの)は③「自己をこえ出で没<sup>・</sup>度<sup>・</sup>量<sup>・</sup>的<sup>・</sup>な  
ものへと追いやられる」。「没<sup>・</sup>度<sup>・</sup>量<sup>・</sup>的<sup>・</sup>なもの」は  
「度量の無限性」であり、ゆえに「買うための  
販売の反復または更新」なのである。そして  
「或るもの」が「その定量のたんなる変化を  
通じて没落する」ことは次に詳しく説かれる。

「買うための販売の反復または更新が、この過  
程そのものと同じ」なのだから、「この過程そ  
のもの」の「究極目的」も「この過程の外にあ  
る」。そして対応する『大論理学』④には「外  
的性状」とあり、「性状 Beschaffenheit」とは  
「或るものに属してはいるが、むしろ或るもの  
の他在である」(1 p.136)ところの「規定態」・  
換言して対他的性質である ― 言語事実を挙  
げれば、私は四歳の孫に向かっては「さような  
ら」と言わずに「ばいばい」と言う―。つま  
り「大きさ ― それは没<sup>・</sup>度<sup>・</sup>量<sup>・</sup>的<sup>・</sup>なもの(反復  
と更新)において、その変化を通して或るもの  
(買うための販売)を没落せしめるもの ― は



無関心的な外的性状であって、この性状のもとに定在はとらえられる」が、これを『資本論』に即して言えば、「買うための販売」（定在 Dasein）が「この過程の外にある究極目的のもとに」とらえられる（その限度と目的とを見いだす）、ということである — ‘die gleichgültige äußerliche Beschaffenheit, an der’ と ‘an einem außer ihm liegenden Endzwecke’ との構文対比 —。その「究極目的」は「消費、すなわち特定の諸欲求の充足」だが、「定在」（買うための販売）は「性状によって破壊されることがありうる」。「循環  $W - G - W$  は、ある一つの商品の極から出発して別の商品の極で終結するのであって、このあとの商品は流通から出て消費にゆだねられる」（p.255）ようにである — 「終結する abschließen」と「破壊する zerstören」は類語。“Ich habe mit ihm abgeschlossen.”（私は彼と絶交した）<sup>(5)</sup> —。ここでも言語事実に触れれば、小学生時代友達どうし「お」を強調して「さよおなら」と言い合ったが、これは無論別れの挨拶ではない。

ただし「性状」については「或るものは性状をもつことをその本質としている」（1 p.136）とも説かれ、そうである以上、或るものはその性状によって破壊されるだけではないだろう。18パラグラフの読解においてもこの点の一つのポイントであり、『大論理学』は後にふたたび「性状」に言及する —。

### 3. 18パラグラフ第2文以下の読解

「C没度量的なもの」2パラグラフは全40文をもつ長大なパラグラフであり、これが『資本論』18パラグラフ第2文以下の16箇の文に対応する。それゆえ対応関係は必ずしも一文対一文ではない。『資本論』第2文に対応するのは『大論理学』の4箇の文である。

(2)

＜資＞ 第1節資本の一般的定式 18パラグラフ 第2文

これに反して、販売のための購買では、始まりも終わりも同じもの、貨幣、交換価値であり、そしてすでにこのことによって、その運動は無限である。Im Kauf für den Verkauf dagegen sind Anfang und Ende dasselbe, Geld, Tauschwerth, und schon dadurch ist die Bewegung endlos.

＜大＞ C没度量的なもの 2パラグラフ 第1文～第4文

①質的な比はたんなる量的な比へと移行するが、このたんなる量的な比はいかなる否定的統一をもたず、またそれとともにいかなる質的な比でもない、②そしてこれらの比をともなつて生じた変化は質的变化ではない Das qualitative Verhältnis geht über in bloß quantitative Verhältnisse, die keine negative Einheit haben und damit keine qualitativen Verhältnisse sind ; die mit ihnen eingetretene Änderung ist nicht eine Qualitäts-Änderung. [原書は二文] ③だが逆に比のこのさしあたりは無関心的な外面性がふたたび質化する規定態であり、こうして無限に進む。Aber umgekehrt wird diese zunächst gleichgültige Äußerlichkeit des Verhältnisses wieder eine qualifizierende Bestimmtheit und so fort ins Unendliche. ④その限りでは無限進行の悪無限性が現存している。Es ist insofern die schlechte Unendlichkeit des unendlichen Progresses vorhanden.

『資本論』に ‘endlos’ とあり『大論理学』には ‘unendlich’ とあるように、対応のポイント

は「無限」である。

『大論理学』①「質的な比〔相関〕がたんなる量的な比〔相関〕へと移行する」のだから、『資本論』も「買うための販売」（質的な比）を離れてそれと量的（外的）に相関する「販売のための購買」に話題を転じる。その転じ方は「これに反してda-gegen」という直接的なものであり、つまり「このたんなる量的な比はいかなる否定的統一をもたず、またそれとともにいかなる質的な比でもない」——『資本論』の語順が原書と邦訳で異なることに注意——。そして②「これらの比をともなって生じた変化は質の変化ではない」ので、「（販売のための購買では）始まりも終わりも同じもの」である。

③「逆に比〔始まりと終わりの相関〕のこのさしあたりは無関心的な外面性がふたたび質化する規定態である」にかかわっては、次が参考になる。

＜大＞ 一は、数的一として、すなわち、それにとっては他者への関係がまったく外的であるところの無関心的なものとして、数の原理である。しかし数はこの一の関係である；数は、多くの一として自己へと還帰している統一である。……（中略）……〔数は〕無限性である。（1 p.225）

この叙述を「一：貨幣」「数的一：金」「数：交換価値」の対応において読むことができる<sup>(6)</sup>。つまり「貨幣」は「金」として「他者への関係がまったく外的であるところの無関心的なもの」だが、しかし「交換価値」は「多くの貨幣として自己へと還帰している統一」である。換言すれば「交換価値」（数）は「外面性の本来的に規定された存在」<sup>(7)</sup>（同）であるから、「こうして無限に進む」。

④「その限りでは無限進行の悪無限性が（す

でに）現存している」のと同様、『資本論』でも「すでにその運動は無限である」。それゆえ循環 $G - W - G$ の無限性も揚棄されるべきもの・その限りで否定的なものなのである——「買うための販売」から「販売のための購買」に直接的に転じた（これに反して）ことの欠陥——。課題を先取りして言えば、無限性には「悪無限性」の他に「真無限性」があり、前者から後者への進展においては先の「性状」がかかわってくる。

(3)

＜資＞ 第1節資本の一般的定式 18パラグラフ 第3文

確かに、 $G$ が $G + \Delta G$ になり、100ポンド・スターリングが100プラス10ポンド・スターリングになってはいる。Allerdings ist aus  $G, G + \Delta G$ , geworden, aus den 100 Pfd. St., 100 + 10.

＜大＞ C没度量的なもの 2パラグラフ 第5文～第6文

⑤——没度量的なものは度量がそれへと移行してゆくたんに量的なもののうちに成りたっている Das Maßlose besteht in dem bloß Quantitativen, in welches ein Maß übergeht；⑥定量はそのようなものとして没度量的なものである。das Quantum ist als solches das Maßlose.

『大論理学』は「悪無限性の現存」を具体的に説き、それは⑤「没度量的なものは度量がそれへと移行してゆくたんに量的なもののうちに成りたっている」ことである。そして⑥「定量はそのようなものとして没度量的なものである」。『資本論』で「最初に前貸しされた価値 der ursprünglich vorgeschobne Werth」（p.256）である

「100 ポンド・スターリング」は「度量」である。「前貸し」とはそうされるに相応しい *gemäß* 量において行なわれるからである — ‘*vor-schießen*’ ← ‘*schießen*’ : 「(当たるように) 撃つ」—。すると「100 ポンド・スターリングがそれになっている」ところの「100 プラス 10 ポンド・スターリング」は「度量がそれへと移行してゆくたんに量的なもの・「定量」である — ‘*übergehen*’ と ‘*werden*’ は類語 —。つまり「100 プラス 10 ポンド・スターリング」もまた「そのようなものとして没度量的なものである」。

(4)

＜資＞ 第1節資本の一般的定式 18 パラグラフ 第4文

しかし、単に質的に考察すれば、110 ポンド・スターリングは 100 ポンド・スターリングと同じもの、すなわち貨幣である。Aber bloß qualitativ betrachtet, sind 110 Pfd. St. dasselbe wie 100 Pfd. St., nämlich Geld.

＜大＞ C 没度量的なもの 2 パラグラフ 第7文

しかし逆に没度量的な量的な比そのものがふたたび特有の比になるから、こうして没度量的なものはそれ自身のもでふたたび自己を揚棄する。Da aber umgekehrt das maßlose quantitative Verhältnis selbst wieder zu einem spezifischen wird, so hebt sich das Maßlose so wieder an ihm selbst auf.

『大論理学』寺沢注は第7文を「「度量の諸比の結節線」を念頭において述べている」(1 p.453 訳者注56)としている。つまり「特有の比[相関]」は「量的な区別のうちに存する」(1 p.351)ところの「質的な比[相関]」である

から、『資本論』も「単に質的に考察すれば」と説く。そして「没度量的な量的な比[相関]そのもの(100 プラス 10 ポンド・スターリング)がふたたび特有の比(110 ポンド・スターリング)になるから、こうして没度量的なものはそれ自身のもでふたたび自己を揚棄する」—「100 プラス 10 ポンド・スターリング」はその「プラス」であることにおいて相関が直接的であり、すなわち「相関そのもの」である—。つまり「110 ポンド・スターリングは 100 ポンド・スターリングと同じもの、すなわち貨幣である」。

(5)

＜資＞ 第1節資本の一般的定式 18 パラグラフ 第5文

また量的に考察しても、110 ポンド・スターリングは、100 ポンド・スターリングと同じようにある限定された価値額である。Und quantitativ betrachtet, sind 110 Pfd. St. eine beschränkte Werthsumme wie 100 Pfd. St.

＜大＞ C 没度量的なもの 2 パラグラフ 第8文～第10文

⑧したがって現存しているものは特有の比の否定だけではなくて、量的な前進そのものの否定でもある。Was also vorhanden ist, ist nicht nur die Negation des spezifischen Verhältnisses, sondern auch die Negation des quantitativen Fortgangs selbst. ⑨無限なものは二つの契機の否定である Das Unendliche ist diese Negation beider Momente; ⑩両契機に欠けているのは絶対的な規定である。es ist die absolute Bestimmung, welche ihnen fehlt.

「没度量的なもの」すなわち「度量の無限性」



(こうして無限に進む)が「それ自身のもとでふたたび自己を揚棄する」のだから、⑧「現存しているものは特有の比の否定だけではなくて、量的な前進そのものの否定でもある」。これについて寺沢注は次を説く。

悪無限性から真無限性へともってゆくための議論である。質論および量論でやったのと同じパターンで度量における無限性を論じ、「度量の無限性」として「没度量的なもの」を導きだそうとしているのである。(1 p.453 訳者注57)

『資本論』では「110ポンド・スターリングは、100ポンド・スターリングと同じようにある限定された価値額である」とされ、「ある限定された価値額」が同じ「ある限定された価値額」になるのだから、ここでも「量的な前進そのものの否定である」。

『大論理学』⑨はこれまでの小括であり、⑩はそれを承けての繋ぎである。その「絶対的な規定」は少し後にも⑭「絶対的な規定された存在」とある。そこで次を引いておこう。

<大> 空虚なものは真理態においては直接的に・それだけで独立して無関心的に一に対立しているのではなくて、それは一の他者へと関係する運動であり、あるいは一の限界である。けれども一はそれ自身が、絶対的な規定された存在として、純粋な限界・純粋な否定・または空虚なものである。したがって一は、空虚なものにかかわりあうことによって、自己への無限な関係である。(1 p.169)

つまり「空虚なものにかかわりあうことによって、[他ならぬ]自己への無限の関係die un-

endliche Beziehung auf sichである」ゆえに「絶対的な規定」であるが、繋ぎでこのことを示した後、次文以降でその次第が詳述される。

(6)

<資> 第1節資本の一般的定式 18パラグラフ 第6文

もし110ポンド・スターリングが貨幣として支出されるとすれば、それは自分の役割を捨てることになるであろう。Würden die 110 Pfd. St. als Geld verausgabt, so fielen sie aus ihrer Rolle.

<大> C 没度量的なもの 2パラグラフ 第11文

特有の比はまずはじめには、比として区別をそれ自身のもとに〔顕在的に〕もっており、かつまた、その項が直接的な正比においてのように直接的な大きさでなく・単位ではなく、特有化され・定立された量の規定であるのだから、本来的に規定された比である。Das spezifische Verhältnis ist zunächst das an sich bestimmte, weil es als Verhältnis den Unterschied an ihm selbst hat und weil auch seine Seiten nicht unmittelbare Größen, nicht Einheiten wie im unmittelbaren direkten Verhältnis, sondern spezifizierte, gesetzte Quantitätsbestimmungen sind.

『大論理学』原文の冒頭“Das spezifische Verhältnis ist zunächst das an sich bestimmte, …”を別訳して、「特有の相関はまずはじめには潜在的に規定された相関である」を得る。『資本論』に即して言えば、「販売のための購買」において「貨幣」は確かに「最初に前貸しされた価値」(特有の相関)であるが、それも「まずはじめには潜在的に規定された相関」なのだから、

「もし110ポンド・スターリングが貨幣として支出されるならば」という可能性が仮定されるのである。

さて「特有の比」は「比として区別をそれ自身のもとに〔顕在的に〕もっている」が、区別される「その両項は直接的な正比においてのように直接的な大きさでなく・単位ではない」。言及される「直接的な正比」については次のように説かれる。

＜大＞ 指数は正比そのものにおいては直接的な量的規定・換言すればなんらかのひとつの定量一般である。指数はひとつの定量をなしているが、この定量はもっぱら定量そのものとして比のうちにある。比の両項をなしている定量は揚棄されたものとして定立された定量である；それらの定量は無関心的な定量ではなく、したがって二つの定量ではない。そうではなくて、おのおのの定量がその規定態を他の定量のもとにもっている；だから〔比の両項をなしている〕それらの定量はただひとつの定量・すなわち単一な指数をつくりなしており、そしてそれらの定量自身はこの〔指数という〕統一のうちで無関心的な定量として定立されている。(1 p.300)

つまり直接的な正比の両項は「〔指数という〕統一〔単位〕のうちで in dieser Einheit 無関心的な定量として定立されており」——例えば指数が7の正比7:1、14:2、…において、前項は7、14、…の何でもよい「直接的な大きさ」である——、「両項は直接的な正比において直接的な大きさであり・単位〔統一〕である」とはこのことを謂う。これに対して比の両項が「特有化され・定立された量の規定である」のは「べき相関 Potenzenverhältnis」(本来的に規定され

た比)である。「べき相関において、定量は自己自身からの区別としてのその区別 der Unterschied seiner als von sich selbst である」(1 p.310)からである。そして度量におけるかかる相関は「選択親和性 Wahlverwandtschaft」である。すなわち

＜大＞ 選択親和性において特有の独立したものは直接に本来的に規定されているというその最初の性格を完全に失う；それはただ向自存在的な否定的統一としてのみ本来的に規定されているのである。この統一は、量的なものと質的なものとの自己へと還帰した移行運動として、量的なものと質的なものとの絶対的統一であることが示された。このことによってこの統一は、自己において量的な区別として自己自身に対して無関心的に自己内で崩解するか、あるいは自己において質的なものとして自己に対して否定的にかかわりあう——この二つのことはここでは同じことである——そして上に示された仕方では自己を特有化する、というように規定されている。(1 p.344)

『資本論』においても110ポンド・スターリングは「本来的に規定された相関」(G－W－G)であった。ところがその「110ポンド・スターリングが貨幣として支出される」なら、それは「直接的な大きさ」であり、GとWとは「直接的な正比」をなす——W:G、2W:2G、…——。これは「本来的に規定された相関」ではないのだから、このとき「110ポンド・スターリングは自分の役割を捨てることになる」のである——なお上の引用中「量的な区別として自己自身に対して無関心的に自己内で崩解する」とあることは、先に「買うための販売」(定在)が「性状によって破壊される」とされ

たこととの関連で注目される。その「崩壊する」ことと「自己において質的なものとして自己に対して否定的にかかわりあう」ことが「ここでは同じことである」ように、性状もまた上に触れた定在の破壊にとどまらないことが示唆されるからである――。

(7)

＜資＞ 第1節資本の一般的定式 18パラグラフ 第7文

それは資本であることをやめるであろう。

Sie hörten auf Kapital zu sein.

＜大＞ C 没度量的なもの 2パラグラフ 第12文～第13文

⑫しかしこの規定された存在そのものは自己を維持せず、それはそれの他者と連続しあっており、こうしてたんに量的な区別へと、否定的統一によって特有化されていない・直接的な定量のうちに成りたっている区別へと移行する Aber dieses Bestimmtheits an sich hält sich nicht, es kontiniert sich mit seinem Anderen und geht in den bloß quantitativen Unterschied über, einen Unterschied, der in unmittelbaren, nicht durch die negative Einheit spezifizierten Quantnis besteht; ⑬しかしこの区別はむしろ特有の比へと還帰する。dieser aber geht vielmehr in das spezifische Verhältnis zurück.

⑫「この規定された存在そのもの dieses Bestimmtheits an sich」は「本来的に規定された比 das an sich bestimmte Verhältnis」を承けており、その説くところは「選択親和性」と「没度量的なもの」とのあいだに位置する「度量の諸比の結節線 Knotenlinie von Maßverhältnissen」の叙述が参考を供する。

＜大＞ 排除的でありかつそのことによって独立的であることが立証されている度量の比が現存している；比の項がそのもろもろの指数の一つにその他の指数に対して与える優位はその指数の他の指数に対する定量に基づいている。より多いことまたはより少ないことが排除的な・質的なものである。だが逆にそのようなより多いことまたはより少ないことがよってもって規定されるゆえんのものは特有のものである。このようにして量的な区別たらしめられている質的なものは外的なもの・うつろいゆくもの ein Äußerliches, Vorübergehendes になる。(1 p.350)

そしてこれについてはさらに寺沢注が参考になる。

「より多いことまたはより少ないことは、元来は、定量の規定として、連続的な・量的なものである」が、それがいまや指数の一つに優位が与えられること（選択親和性）によって「排除的な・質的なものになっている」のであるが、しかし以下に述べられるように、元来が量的なものであるから、流動化されてゆくのである。(1 p.450 訳者注43)

つまり「本来的に規定された比」すなわち「排除的でありかつそのことによって独立的であることが立証されている度量の比」だが、それは流動化されるので「潜在的に規定された比 [相関]」なのである。すなわち『資本論』の「それ」だが、「より多いことまたはより少ないこと ―「直接的な定量のうちに成りたっている区別」― が排除的な・質的なものである」

ので、より多いとき「規定された存在そのもの」(特有のもの *das Spezifische*) は「資本である」が、より少ないとき「資本であることをやめる」(自己を維持しない)。<sup>⑬</sup>「しかしこの区別はむしろ特有の比 [相関] へと還帰する」、すなわち「資本である」ことと「資本であることをやめる」こととの相関への還帰だが、具体的には次文に説かれる。

(8)

＜資＞ 第1節資本の一般的定式 18パラグラフ 第8文

もし流通から引きあげられれば、それは蓄蔵貨幣に石化して、最後の審判の日まで蓄え続けられてもびた一文もふえはしない。  
Der Cirkulation entzogen, versteinern sie zum Schatz und kein Farthing wächst ihnen an, ob sie bis zum jüngsten Tage fortlagern.

＜大＞ C 没度量的なもの 2パラグラフ 第14文

したがって両者のいずれも絶対的な規定された存在ではない。Keins von beiden ist also absolutes Bestimmtheitsein.

『大論理学』である。「絶対的な規定された存在」が「空虚なものにかかわりあうことによって、自己への無限の関係である」ことは上に説いたが、ここでは「両者 (特有の比と量的な比)」がそうでないと謂う。ではどのようなものか。引き続き「度量の諸比の結節線」を参照する。

＜大＞ 一般に、特有の比のたんに量的な比への・また量的な比の特有の比への移行が現存している。質的な比が量的な区別たらしめられることによって、一面では質的な

比は量的な区別のうちに存する；質的な比は量的な区別においてそれがあるところのものであり、しかも量的なものは質的な比の存立の無関心態である *es bleibt darin, was es ist, und das Quantitative ist die Gleichgültigkeit seines Bestehens*；独立したものをつくりなしている特有のものによって量的なものがそこで規定されているのは、両者のこの統一である。es ist diese Einheit beider, worin das Quantitative durch das Spezifische bestimmt ist, welche ein Selbständiges ausmacht. (1 p.351)

「特有の比のたんに量的な比への・また量的な比の特有の比への移行が現存している」のだから、これは「自己への無限の関係」ではない。すなわち「質的な比は量的な区別においてそれがあるところのものであり、しかも量的なものは質的な比の存立の無関心態である」。つまり質的な比の存立するところ、それへの無関心態である量的なものが存するのである (前文の予告したこと)。これを『資本論』に即して言えば、「110 ポンド・スターリング」(質的な比)の存立するところ、それが「流通から引きあげられた蓄蔵貨幣」( $G - W - G$ への無関心態)が存する。そして「質的な比は量的な区別においてそれがあるところのものである」のだから、量的なものは「量的な区別においてそれがあるところのものではない」。それゆえ蓄蔵貨幣は「最後の審判の日まで蓄え続けられてもびた一文もふえはしない」。つまり「蓄蔵貨幣」と「びた一文ふえない」ことの「この統一」が「石化した蓄蔵貨幣」なる「量的なものの規定」である。

(9)

＜資＞ 第1節資本の一般的定式 18パラグラフ

ラフ 第9文

ひとたび価値の増殖なるものが問題となれば、増殖の欲求は、110ポンド・スターリングの場合も100ポンド・スターリングの場合と同じである。というのは、両者ともに交換価値の限定された表現であり、したがって両者ともに、大きさの増大によって富自体に近づくという同じ使命をもつからである。Handelt es sich also einmal um Verwerthung des Werths, so besteht dasselbe Bedürfnis für die Verwerthung von 110 Pfd. St. wie für die von 100 Pfd. St., da beide beschränkte Ausdrücke des Tauschwerths sind, beide also denselben Beruf haben sich dem Reichthum schlechthin durch Größenausdehnung anzunähern.

<大> C 没度量的なもの 2パラグラフ

第15文～第19文

⑮この無限性はしたがって一般に両側面の否定のうちに成りたっている。Diese Unendlichkeit besteht also überhaupt in der Negation beider Seiten. ⑯しかし同時にこの否定は両者のそれぞれの彼岸ではなく、両者の外にみいだされる無限性または両者のたんに内的な無限性でもなくて、両者そのもののもとに定立された無限性である。Aber zugleich ist diese Negation nicht das Jenseits einer jeden, eine außer ihnen befindliche oder nur ihre innere Unendlichkeit, sondern ihre an ihnen selbst gesetzte Unendlichkeit. — ⑰質的無限性はすなわち有限なものもとの無限なもの突然の出現・直接的な移行・此岸がその彼岸において消失する運動であった。Die qualitative Unendlichkeit war nämlich das Hervorbrechen des Unendlichen am Endlichen, der unmittelbare

Übergang und das Verschwinden des Diesseits in seinem Jenseits. ⑱これに対して量的な無限性は定量の連続性・自己をこえ出る定量の連続性である。Die quantitative Unendlichkeit hingegen ist die Kontinuität des Quantums, eine Kontinuität desselben über sich hinaus.

『大論理学』⑮「(両者の) この無限性はしたがって一般に両側面の否定のうちに成りたっている」。これについては寺沢注が次を説く。

特有の比(質的なもの)も直接的な比(量的なもの)も、いずれも絶対的に規定された存在ではない(相互に否定しあい・相互に転化する)ということがここでいわれている度量の無限性(=真無限性)の内容である。(1 p.453 訳者注58)

「相互に否定しあい・相互に転化する」両者(質的なものと量的なもの)だが、さりとて⑯「この否定は両者のそれぞれの彼岸ではない」。ということは悪無限的な相互転化ではなく、相互否定・相互転化がより進展したのである。この点について「量的無限性」に関する寺沢注が参考になる。

「無限進行」にかかわって前には「否定的なものの無力」といわれたものが、いまや強力な否定としてとらえなおされている。この無力な否定から強力な否定への転換の根拠は、すでに無力な否定を「無力」として自覚したことにあつた。……(中略)……この「無力な否定」にすぎない無限進行がしばしば「究極的なもの」として賛美されてきたのであり、そしてその限りでは、転換の可能性はとどまっていた。だがへー



ゲルは、本文で無限進行を「否定的なものの無力」としてとらえ……（中略）……たのである。無力な否定そのものが否定されるのであるが、このあとの否定が、否定の否定としての強力な否定である。（1 p.409 訳者注29）

ここでも同様の転換であり、否定（相互転化）が否定されて（彼岸でない）無限性はいま⑮「両者そのもののもとに定立された無限性である」。だから⑯は「質的無限性」の「有限なもののもとでの無限なもの突然の出現」を、⑰は「量的な無限性」の「自己をこえ出る定量の連続性である」ことを説く。

『資本論』で「両側面」は「蓄蔵貨幣」と「びた一文ふえない」である。その「両側面の否定」であるから「価値の増殖という問題」である。G - W - G' の否定（蓄蔵過程）が否定されるから「増殖の欲求」は「否定の否定」である。また100ポンド・スターリングは110ポンド・スターリングでなく、しかし「（増殖の欲求は）同じ」だというのだから、110ポンド・スターリングは「否定の否定」である。そして「交換価値の限定された表現」が「（神の）召命 Berufをもつ」のだから、それは「有限なもののもとでの無限なもの突然の出現」・「此岸がその彼岸において消失する運動」である。また「両者」（100ポンド・スターリング・110ポンド・スターリング）が「大きさの増大によって豊富 Reichthum 自体に近づく」のだから、それは「自己をこえ出る定量の連続性」なのである。

(10)

＜資＞ 第1節資本の一般的定式 18パラグラフ 第10文  
確かに、最初に前貸しされた価値である

100ポンド・スターリングは、流通においてその価値につけ加えられる10ポンド・スターリングの剰余価値から一瞬のあいだ区別されはするが、しかしこの区別はすぐまた消えてなくなる。Zwar unterscheidet sich für einen Augenblick der ursprünglich vorgeschossene Werth 100 Pfd. St. von dem in der Cirkulation ihm zuwachsenden Mehrwerth von 10 Pfd. St., aber dieser Unterschied zerfließt sofort wieder.

＜大＞ C 没度量的なもの 2パラグラフ  
第19文～第20文

⑱質的に有限なものは無限なものになる  
Das Qualitativ-Endliche wird zum Unendlichen; ⑲量的に有限なものはそれ自身のもとでそれの彼岸であり、自己をこえてその彼方をさし示す。Das Quantitativ-Endliche ist sein Jenseits an ihm selbst und weist über sich hinaus.

「最初に前貸しされた価値である100ポンド・スターリングが、流通においてその価値につけ加えられる10ポンド・スターリングの剰余価値から区別される」なら、「110ポンド・スターリングの場合と100ポンド・スターリングの場合が同じ」とは言えない。だから「一瞬のあいだ区別されはするが、しかしこの区別はすぐまた消えてなくなる」と説かれるのだが、これにかかわっては『大論理学』の次の叙述が参考になる。

＜大＞ 向一存在と向自存在とは相互に対立しあう真の規定態をなしてはいない。向一存在とは他者が揚棄されていることを表現しており、したがってそれは本質的には向自存在と一つである。向自存在は、それが

揚棄された他在であることによって、自己への無限の関係である。[向自存在と向一存在との] 区別が一瞬間[でも] 受け入れられて *der Unterschied auf einen Augenblick angenommen*、そしてここですでにひとつの向自存在するものについて語られるとすれば、その限りでは、向自存在するものとは、揚棄された他者・したがって向一的である他者としての自己に関係するその当のもの自身である。向自存在は自己への関係であるが、しかし無限な関係である、したがってそのなかには否定が含まれている。(1 p.165)

G－W－Gにおいても同様である。「最初に前貸しされた価値である100ポンド・スターリング」と「流通においてその価値につけ加えられる10ポンド・スターリングの剰余価値」とは「相互に対立しあう真の規定態をなしてはいない」。というのは10ポンド・スターリングは「向一存在」として、「本質的には向自存在(100ポンド・スターリング)と一つである」からである ― ただしここで10ポンド・スターリングが「向一的な他者」であることは重要である ―。だから「(一瞬間存した) 区別はすぐまた消えてなくなる」のである。つまり①「質的に有限なもの(最初に前貸しされた価値)は無限なものになり」、②「量的に有限なもの(100ポンド・スターリング)はそれ自身のものでその彼岸であり、自己をこえてその彼方をさし示す」。

なお「(限界の) 彼方をさし示す *hinausweisen*」の類義語に '*hinweisen*' があり、これについての寺沢注は次である。

「指し示す」(*hinweisen*) という用語は、ヘーゲルの『論理学』では使われることの

まれな用語である。ここでこのことばは何を意味しているのであろうか。「Aは、Pでありながら、Qを指し示している」とは、Aはいま現にPであり、したがってQではないのであるが、しかしAはPでありながら、いやむしろPであるがゆえに、AはPであることをやめてQへと移行してゆかざるをえない、ということが明らかである、ということの意味するのであろう。(2 p.378 訳者注23)

'*hinausweisen*' についても基本は同じことであり、100ポンド・スターリング (G) は110ポンド・スターリング (G') へと移行してゆかざるをえないのである。

(11)

<資> 第1節資本の一般的定式 18パラグラフ 第11文

過程の終わりには、一方の側に100ポンド・スターリングというもとの価値が、そして他方の側には10ポンド・スターリングという剰余価値が出てくる、というわけではない。Es kommt am Ende des Processes nicht auf der einen Seite der Originalwerth von 100 Pfd. St. und auf der andren Seite der Mehrwerth von 10 Pfd. St. heraus.

<大> C没度量的なもの 2パラグラフ 第21文

しかし度量の特有化の無限性はそれ自身のもとの、他者をその彼岸としてもたないで、度量が総体性であること・度量が自己に対立する他者をもったりあるいは定立したりしないこと・ただこのことだけを度量の自己をこえてゆく否定のなかで定立するところのこの総体性である。Aber die

Unendlichkeit der Spezifikation des Maßes ist an ihr selbst diese Totalität, die das Andere nicht als ein Jenseits seiner hat, sondern nur dies in seiner über sich hinausgehenden Negation setzt, daß es Totalität ist, daß es *nicht* ein Anderes gegen sich hat oder setzt.

上には「質的無限性」と「量的無限性」のそれぞれについて説かれ、ここでは「度量の特有化の無限性」について説く。ここで「しかし」と逆接するのはなぜか。「総体性」についての寺沢注を参照しよう。

ここでいわれている「総体性」とは、質的でもあれば量的でもある全体のことである。質的なものが量的なものへ・量的なものが質的なものへと転化する運動を通じて、このような相互転化の運動の全体を貫いてその根底に存するものが、ここでいわれている「総体性」である。(1 p.453 訳者注 59)

つまりかく「根底」が把握されて、一瞬 10 ポンド・スターリングを「区別」した 100 ポンド・スターリングも「他者をその彼岸としてもたないで」統一（無差別）へと進展するのであり、「しかし」もまたそうした進展を導くための逆接である——つまり①②いずれもが「自己に対立する他者をもったりあるいは定立したりする」、そのこととの対比である——。「一方の側」が此岸であれば「他方の側」（他者）は「その彼岸」だが、「過程の終わり」に「度量（100 ポンド・スターリング）が自己に対立する他者をもったりあるいは定立したりしないこと・ただこのことだけを度量の自己をこえ出てゆく否定のなかで定立するところのこの総体性である」のだから、 $G - W - G'$  は「度量の特有化の無限性」なのである。

(12)

＜資＞ 第 1 節資本の一般的定式 18 パラグラフ 第 12 文

出てくるのは、110 ポンド・スターリングという一つの価値であって、それは、最初の 100 ポンド・スターリングと同じく、まったく価値増殖過程を開始するのに適した形態にある。Was herauskommt ist Ein Werth von 110 Pfd. St., der sich ganz in derselben entsprechenden Form befindet, um den Verwerthungsproceß zu beginnen, wie die ursprünglichen 100 Pfd. St.

＜大＞ C 没度量的なもの 2 パラグラフ 第 22 文

特有の比は、否定的統一によって規定されている〔二つの〕量の否定的統一である Das spezifische Verhältnis ist die negative Einheit von Quantitäten, die durch sie bestimmt sind ;

『資本論』は「出てくるのは、110 ポンド・スターリングという一つの価値 Ein Werth である」と謂う。そこで 'Ein Werth' にかかわって、「一 Eins」について『大論理学』の説くところを見ておこう。

＜大＞ 一は無規定的であるが、存在〔が無規定的であるそ〕のように無規定的なのではなく、一は無規定態は自己自身への関係である規定態であり・絶対的に規定された存在である。——絶対的に規定された存在は、他者へではなく自己への関係としての規定態・または否定である。Das absolute Bestimmtheitssein ist die Bestimmtheit oder Negation als Beziehung nicht auf Anderes,

sondern auf sich. したがって一の自己とのこの相等性を一がもつのは、それが打ち消しの作用であり・自己からはなれて他者へとこえ出てゆく一つの方向である限りでのみのことだが、しかしこの方向は、それが向かってゆくいかなる他者も存在しないのであるから、直接に揚棄されており、向きを変えて・自己へとたち帰っているのである。(1 p.168)

つまり「110ポンド・スターリングという一つの価値」は「自己自身への関係である規定態」なので、「最初の100ポンド・スターリングと同じく、まったく価値増殖過程を開始するのに適した形態にある」のである――‘entsprechend’は‘angemessen’の類語――。

そこで『大論理学』「特有の比は、否定的統一によって規定されている〔二つの〕量の否定的統一である」を具体的にイメージしてみよう。「否定的統一によって規定されている〔二つの〕量」を $G \cdot \neg G$ と置けば、両者の「否定的統一」は「 $G$ は $G$ である」で表わされる。このとき最初の $G$ は主語 $G$ と・二番目の $G$ は述語 $G$ （したがって $\neg G$ ）と「規定されている」からである。つまり「否定的統一によって規定されている〔二つの〕量の否定的統一」すなわち「特有の相関」は「 $G$ は $G$ である」( $G - G$ )なのである。

いまや「110ポンド・スターリングという一つの価値」は「絶対的に規定された存在」に到ったが、その「絶対的に規定された存在」について寺沢注は「逆説的にきこえるかもしれないが、「無規定的な存在である」ということである」(1 p.393訳者注1)と説く。これは「 $G$ は $G$ である」の同語反復をすることで了解されよう。

(13)

<資> 第1節資本の一般的定式 18パラグ

ラフ 第13文

運動の終わりには、貨幣がふたたび運動の始まりとして出てくる。Geld kommt am Ende der Bewegung wieder als ihr Anfang heraus.

<大> C 没度量的なもの 2パラグラフ  
第23文～第26文

②③それはこの否定的統一として独立して無関心的に成立している。es ist als diese negative Einheit das selbständige gleichgültige Bestehen. ②④しかし特有の比がそれへと自己を特有化したところのものは量の諸規定である Aber zu was es sich spezifiziert hat, sind Quantitätsbestimmungen; ②⑤そうすることによって特有の比は量的な比へと移行しないで、量的な比のなかでただ自己自身へと関係している es geht somit in das quantitative Verhältnis nicht über, sondern bezieht sich darin nur auf sich selbst; ②⑥そして没度量態ないしは度量の否定・すなわち比の量的なものは比の自己自身への否定的な関係である。und die Maßlosigkeit oder seine Negation, nämlich das Quantitative des Verhältnisses, ist seine negative Beziehung auf sich selbst.

『資本論』を具体例にして『大論理学』を読む。110ポンド・スターリング（絶対的に規定された存在）は「他者へではなく自己への関係としての規定態・または否定である」。「自己への関係」なのだから、②③「それ（特有の相関・110ポンド・スターリング）はこの（ $G$ と $G$ との）否定的統一として独立して無関心的に成立している」。つまり「( $G - W - G$ )の運動」は110ポンド・スターリングになって「終わる」のである。②④「しかし特有の比〔相関〕がそれへと自己を特有化したところのものは（100ポンド・

スターリングおよび10ポンド・スターリングという)量の諸規定である」 — つまり「独立したものをつくりなしている特有のものによって量的なものがそこで規定されているのは、両者のこの統一である」(再掲) — ②⑤「そうすることによって特有の比は量的な比[相関]へと移行しないで、量的な比のなかでただ自己自身へと関係している」、すなわち100ポンド・スターリングと10ポンド・スターリングであるのは一瞬間であって、過程の終わりには「一つの価値」である。②⑥「そして没度量態ないしは度量の否定・すなわち比[相関]の量的なものは比の自己自身への否定的な関係である」。つまり「運動の終わり(没度量態ないしは度量の否定)には、貨幣がふたたび運動の始まり(終わりへの否定的な関係)として出てくる」。

ところで18パラグラフの全体が対応する「A絶対的なものの開陳」の6パラグラフ第5文は次であった。

＜大＞ — それだから絶対的なものを開陳するあの運動だけでなく、ひたすらそのもとへと到達したこの絶対的なものそのものもまた不完全なものである。Nicht nur jenes Auslegen des Absoluten ist daher ein Unvollkommenes, sondern auch dies Absolute selbst, bei welchem nur *angekommen* wird.

そして「そのもと」に関連して寺沢注は別の箇所次で説く。

「自己のもとの」と訳した原語は“bei sich”である。これは、「未展開の姿にある自己のもとの」を意味する“an sich”とはことになって、「あるべき姿にある自己のもとの」・「展開され・充実された姿にある自己のもとの」を意味する。“bei sich”に

あるということは、そこから何か別の状態へと移ってゆかなければならないという欠乏の状態にあるのではなく、自足した状態にあること、at homeの状態にあることを意味する。(2 p.383 訳者注21)

これに準えて言えば、いま「価値増殖過程を開始するのに適した形態」にある110ポンド・スターリングは「展開され・充実された姿にある自己のもとに」到達したのである。しかし『大論理学』は「この絶対的なものそのものもまた不完全なものである」と謂う。議論を先取りすれば、これは絶対的なものの「絶対的に絶対的なものではない」(2 p.223)ことを示唆している。そして「本質」への進展を説く度量論は、「没度量的なもの」では相関の両項が相互転化して「無差別Indifferenz」に達するが — 『資本論』18パラグラフが対応 — 、その無差別もまた「不完全なものである」。「無差別にはそれ自身のもとで自己との質的統一であること・すなわち絶対的否定態が欠けている」(1 p.363)からである。だが「相対的な絶対的なもの」(属性)もまた「絶対的否定態が欠けている」のだから、「A絶対的なものの開陳」の論理展開に沿う18パラグラフが同時に「没度量的なもの」に沿って叙されることに奇異は存しないのである。

(14)

＜資＞ 第1節資本の一般的定式 18パラグラフ 第14文

それゆえ、販売のための購買が行なわれる各個の循環の終わりは、おのずから新たな循環の始まりをなす。Das Ende jedes einzelnen Kreislaufs, worin sich der Kauf für den Verkauf vollzieht, bildet daher von selbst den Anfang eines neuen Kreislaufs.



<大> C没度量的なもの 2パラグラフ  
第27文～第28文

②⑦したがって度量の無限性は度量自身を揚棄する運動ではなくて、度量が一つの他者であるということを揚棄する運動である。

Seine Unendlichkeit ist also das Aufheben nicht seiner selbst, sondern seiner, daß es ein Anderes ist : ②⑧この揚棄する運動は、度量がよってもって度量であるゆえんのものとして、度量の否定である。es ist dies die Negation seiner als das, wodurch es ist.

『大論理学』②⑦「度量の無限性は度量自身を揚棄する運動ではなくて、度量が一つの他者であるということを揚棄する運動である」、これは寺沢注の説くように「度量は揚棄されず、あくまで度量でありつづける」(1 p.453 訳者注60)ことを説く。そこで「各個の循環(運動)の終わりは、おのずから新たな運動の始まりをなす」—「(度量が度量)自身でありつづける」、つまり「そのまま von selbst」—。なぜ「新たな運動」なのか。②⑧「この揚棄する運動は—原文の語順にしたがって—度量の否定(運動の終わり)であり」、しかもその否定(終わり)が「まさに度量がよってもって度量であるゆえんのもの」だからである。

(15)

<資> 第1節資本の一般的定式 18パラグラフ 第15文

単純な商品流通 — 購買のための販売 — は、流通の外にある究極目的、すなわち使用価値の取得、欲求の充足、のための手段として役立つ。Die einfache Waa-  
rencirkulation – der Verkauf für den Kauf – dient zum Mittel für einen außerhalb der Cir-

kulation liegenden Endzweck, die Aneignung von Gebrauchswerten, die Befriedigung von Bedürfnissen.

<大> C没度量的なもの 2パラグラフ  
第29文～第30文

②⑨したがって特有の量の関係としての質的な比はこの否定を通じて自己を外的ならしめ、質を欠いた存立たらしめる Das qualitative Verhältnis also als Beziehung spezifischer Quantitäten macht sich dadurch äußerlich, zu einem qualitätslosen Bestehen : ③⑩しかしこの度量の否定がまさに度量がよってもって度量であるゆえんのものであり、度量の特有の性状をつくりなしているものである。aber eben diese seine Negation ist es, wodurch es ist, was seine spezifische Beschaffenheit ausmacht.

『大論理学』②⑨「この否定」は「度量の否定・すなわち比[相関]の量的なもの」である。だから「質的な比は自己を外的ならしめ、質を欠いた存立たらしめる」。そしてそうであれば、相関は③⑩「度量の特有の性状」である。「性状」とは、上に触れたごとく、「或るものに属してはいるが、むしろ或るものの他在である」ところの「規定態」だからである。

『資本論』に即しては、「度量(販売のための購買)の否定」は「購買のための販売」(相関の量的なもの das Quantitative des Verhältnisses)であり、それは「流通の外にある究極目的、すなわち使用価値の取得、欲求の充足、のための手段として役立つ」。目的と手段に関して『大論理学』の説くところを改めて見ておこう。

<大> 一面では、主観性は自己を規定することによって自己を特殊性にするのであり、

自己に内容を与えるのであるが、しかしこの内容は概念の統一の中にとじこめられていて、まだ内的な内容である。この定立する運動・単一な自己内反省はしかしながら、すでに明らかにされたように、直接的に同時に前提する運動である。目的の主観がそのなかで自己を規定するその同じ契機において主観は無関心的外的な客観性に関係づけられている、そしてこの客観性とは主観によってあの内的な規定態に等しくされるべきものである、すなわち概念によって規定されたものとして定立されるべきものであり、なによりもまず手段として〔定立されるべきものである〕。(3 p.240)

すると「手段」はその「規定されたもの ein Bestimmtes」(性状)である。というのは、「究極目的」が「使用価値の取得、欲求の充足」という「主観的目的」であるとき、「手段」(規定された客観)は「無関心的外的な客観性」として定立される(役立つ)からである——「(究極)目的」が「流通の外にある」のだから、逆に「流通」は「(主観的)目的」の外なる客観性である——。かくして「単純な商品流通——購買のための販売」は「度量の特有の性状」である。

(16)

＜資＞ 第1節資本の一般的定式 18パラグラフ 第16文

これに反して、資本としての貨幣の流通は自己目的である。というのは、価値の増殖は、この絶えず更新される運動の内部にのみ実存するからである。Die Cirkulation des Geldes als Kapital ist dagegen Selbstzweck, denn die Verwerthung des Werths existirt nur innerhalb dieser stets erneuerten

Bewegung.

＜大＞ C 没度量的なもの 2パラグラフ  
第31文～第36文

③①——このことが度量の本性であるが、しかしそれは同時に無限進行のうちに現存している。Dies ist seine Natur, aber es ist zugleich in dem unendlichen Progreß vorhanden. ③②すなわち自己自身に対して無関心的なものとしての特有の比は自己自身から自己を突きはなし、自己をべつの特有の比にする。Nämlich das spezifische Verhältnis, als gleichgültig gegen sich selbst, stößt sich von sich selbst ab und macht sich zu einem anderen spezifischen Verhältnis. ③③この比はべつの量的な比である Dieses ist ein anderes quantitatives Verhältnis; ③④そのゆえに両者は相互に無関心的であり、そしてそれらの質的な関係は揚棄されている。darum sind beide gleichgültig gegeneinander, und ihre qualitative Beziehung aufgehoben. ③⑤だがまさにそのことによって両者はただ外的に区別されているにすぎない Aber eben damit sind sie nur äußerlich unterschieden; ③⑥したがって他者への関係は自己の区別されていないものへの・自己の否定としての自己自身への関係である。die Beziehung auf das Andere ist also eine Beziehung auf sein nicht Unterschiedenes, auf sich selbst als auf seine Negation.

二つのテキストの叙述は根拠と帰結の配置順が反対であると読む。『資本論』は根拠が後置されるのに対し、『大論理学』では根拠を述べた後に帰結が示されるからである。

『大論理学』③①「このこと」は「度量の否定がまさに度量がよってもって度量であるゆえんの

ものであり、度量の特有の性状をつくりなしているものである」、このことであり、それが「度量の本性である」と謂われる ― その「度量の本性」が「無限進行のうちに」把握されることは、同じく「性状」に言及する「C没度量的なもの」2パラグラフの最終文ともかわって当面の要点になる ― 。その③①に対応して『資本論』も「価値の増殖」（度量の本性）が「絶えず更新される運動の内部にのみ実存する」（無限進行のうちに現存している）と説く。

その「運動の内部」を説くのが『大論理学』③②以下であり、したがって『資本論』が具体例になりうる。③②「自己自身に対して無関心的なものとしての特有の比（Gすなわち「資本としての貨幣」、具体的には100ポンド・スターリング）は自己自身から自己を突きはなし、自己をべつの特有の比（G'）にする」。この「べつの特有の比〔相関〕」は「購買のための販売」である。③③「この比はべつの量的な比（110ポンド・スターリング）である」。③④「そのゆえに両者（GとG'）は相互に無関心的であり、そしてそれらの質的な関係は揚棄されている」。③⑤「だがまさにそのことによって両者はただ外的に区別されているにすぎない」、これはよからう。③⑥「したがって他者（G'）への関係は自己の区別されていないものへの・自己の否定としての自己自身への関係である」、すなわち『資本論』では「資本としての貨幣の流通は自己目的である」。

なおW－G－Wが「合目的な手段」（3 p.244）であるのに対してG－W－G（自己目的）は「実現された目的」である。

<大> 客観に対する目的の威力はこの自立的に存在する同一性であり、そして目的の活動性はこの同一性の顕現である。（3 p.246）

『資本論』の叙述の展開ももちろんかかる論理の進展に沿ったものである。

(17)

<資> 第1節資本の一般的定式 18パラグラフ 第17文

それゆえ、資本の運動には際限がない。

Die Bewegung des Kapitals ist daher maßlos.

<大> ③⑥C没度量的なもの 2パラグラフ 第37文～第40文

③⑦特有のものの自己からのこの反撥運動はそれの独立態である Dieses Abstoßen des Spezifischen von sich ist seine Selbständigkeit；③⑧したがって独立態は、ただ量的に区別されているにすぎないそれの他者へと、それが自己の否定においてそれがあるところのものであるように関係する、ということに成りたっている。sie besteht also darin, sich auf sein Anderes, nur quantitativ Unterschiedenes so zu beziehen, daß es in seiner Negation das ist, was es ist. ③⑨ ― こうして逆に量的な規定が特有の規定へとひっくり返るが、④⑩しかしそれは特有の規定がそれ自身のもとで量的なものであるからであり、こうして量的なものはそれの他になる運動のなかで自己を維持し、こうしてその性状において、自己の否定のなかでそれがあるところのものであるというその規定にしたがってそれがあるところのものである。So umgekehrt, die quantitative Bestimmung schlägt in spezifische Bestimmung um；aber weil diese an ihr selbst das Quantitative ist, so erhält dieses sich in seinem Anderswerden und ist somit in seiner Beschaffenheit das, was es seiner Bestimmung nach ist, in seiner Negation

das zu sein, was es ist.

引き続き『資本論』が『大論理学』の具体例である。③⑦「特有のものの自己からのこの反撥運動」は $G - W - G'$ ・すなわち「 $G$ は $G$ である」なので「独立態」の運動である。あるいは「資本としての貨幣の流通は自己目的である」ゆえ「資本」は「独立態」なのである。

そこで③⑧「独立態（資本・ $G'$ ）は、ただ量的に区別されているにすぎないそれ（資本）の他者（前貸しされた貨幣・ $G$ ）へと、それ（ $G$ ）が自己（ $G$ ）の否定においてそれ（ $G$ ）があるところのものであるように関係する、ということに成りたっている」。「前貸しされた貨幣が自己の否定においてそれがあるところのものである」のだから、前貸しされた貨幣の「否定の否定」において資本は存立するのである。

そこで③⑨「こうして逆に量的な規定（「前貸しされた」貨幣）が特有の規定（資本〔としての貨幣〕）へとひっくり返る」が、④⑩「それは特有の規定がそれ自身のもで量的なものであるからである」。そしてこの「量的なものはそれの他になる運動のなかで自己を維持する」が、その「自己」とは「その性状において、自己の否定のなかでそれがあるところのものである」というその規定にしたがってそれがあるところのもの」なのだからすなわち「自己の否定」である。すると「この量的なもののそれの他になる運動」（ $G - W - G'$ ・資本）には「際限がない」。このことは『資本論』もすでに「この形態（ $W - G - W$ ）と並んでnebenわれわれは、 $G - W - G$ を見いだす vorfinden」（p.250）と説いていたところだが、これに関連して『大論理学』の次の叙述が注目される。すなわち生命ある個体の主観を「自己目的」だとした上で、次のように説かれる。

＜大＞ 個体がその中で自己自身を消耗させて生きている個体の主観的過程と、個体が自然的手段として自分の概念に適合させて定立する直接的な客観性とは、完全に定立された外面態・無関心的に自分と並列している客観的総体性に関係している過程によって媒介されているのである。Sein subjektiver Prozeß in sich, in welchem es aus sich selbst zehrt, und die unmittelbare Objektivität, welche es als natürliches Mittel seinem Begriffe gemäß setzt, ist vermittelt durch den Prozeß, der sich auf die vollständig gesetzte Äußerlichkeit, auf die gleichgültig neben ihm stehende objective Totalität bezieht. (3 p.278)

「個体の主観的過程」を「思考」と、「客観的総体性に関係している過程」を「延長」と置き換えれば、ここに説かれる論理の属性のそれに通底することは明らかであろう<sup>(8)</sup>。

#### 4. 論理を通して読み解くこと

「資本の一般的定式」節の各パラグラフにおける論理展開は、その中核的な論点に関する限り、それらと直接的に対応する『大論理学』「A 絶対的なものの開陳」の叙述を参照することで比較的容易に把握することができる。このことは上にも述べた。それにもかわらず、18パラグラフはその長い叙述を通して、いわばプラスアルファの情報——すなわち「没度量的なもの」の論理展開——を与えている。かかる叙述構成を採る理由を最後に考えておこう。

18パラグラフが直接対応する「絶対的なもの」章の叙述は次であった。

＜大＞ — それだから絶対的なものを開陳するあの運動だけでなく、ひたすらそくて

もとへと到達したこの絶対的なものそのものもまた不完全なものである。

ここで「絶対的なものそのものは不完全なものである」とあるのは、「絶対的なもの」が「絶対的に絶対的なもの」でなく「相対的に絶対的なもの」であることを導くためであった。換言すれば、かかる絶対的なもののそれ自身「属性」（属性一般者）であることを説くためであった。つまり『大論理学』の論理展開は、『資本論』が「資本の一般的定式」節の末尾で、「 $G - W - G'$ は、直接に流通部面に現われる資本の一般的定式である」と説く、その論理の展開に合致する。

ところでヘーゲル論理学の「属性」はスピノザのそれを批判的に継承しており、すなわち「延長」（存在）と「思考」（本質）の二類が「同一性と区別との同一性」において把握される——「絶対的なものが絶対的なものであるのは、もっぱらそれが抽象的同一性ではなくて、存在と本質との同一性ないしは内のものと外のものとの同一性であるからである」（2 p.223）——。それゆえ『資本論』でも  $G - W - G'$  は「本質」として、「存在」たる  $W - G - W$  との同一性において把握されるのでなければならない。すなわち  $G - W - G'$  は、絶対的なものとして開陳される  $G - W - G$  ( $G - W - G'$ ) の自己還帰として・揚棄された  $G - W - G$  と  $W - G - W$  とがそれに内属するところの絶対的なものとして把握されねばならない——上に引いた『資本論』p.250の‘neben’がそのことを示している——。

『大論理学』においては「A絶対的なものの開陳」は本質論第三編に位置するから、存在論での「存在は本質である」・本質論第一編での「本質は存在である」・そして第二編での「本質的存在」（現象）を踏まえいることは読者にと

って自明である。そして『資本論』においても「商品の二要因」以来「同一性と区別との同一性」が一貫して説かれることは同じなのだが、それでも「意味」を中心に据えた読解はともすれば「区別」を一面化し、一項の他項に対する優位だけを把握する。「資本の一般的定式」節の叙述でも、例えば「単純な商品流通では、同じ貨幣片の二度の場所変換がその貨幣片がある人の手から別の人の手に最終的に移すのであるが、この場合  $[G - W - G]$  には同じ商品の二度の場所変換が貨幣をその最初の出発点に還流させる」（12パラグラフ）という叙述を読むと、人は  $W - G - W$  の有限であることは把握しても、無限なものそのものである  $G - W - G$  も同じく真理態でないことを失念する。これはすなわち  $G - W - G$  の四肢構造（四分法）Quadruplizitätであることを見失うことである<sup>(9)</sup>。

けれども「没度量的なもの」に対応する論理の叙されることでその弊は避けられる。そこで論理の展開は対立する質的なものと量的なものとの相互転換がまさに「無限に続く」ことを説いており、したがってその真理態の把握においては両者の揚棄されねばならないことが見通されるからである。本稿が示したのはその一端であった。それは同時に、『資本論』を論理的に読む上での「論理的構文論」の有効性を示すことでもあった。

## 注

- (1) 「論理的構文論 die logische Syntax」については拙稿「『論理的構文論』とヘーゲル論理学」（『理想』692号）および「『論理的構文論』によるソシュール『一般言語学講義』読解」（『人文論集』95号）を参照されたい。ここではウィトゲンシュタインによるその把握と具体例のみを挙げておく。『論理哲学論考』に次が説かれる。

3-33 論理的構文論においては、或る記



号の意味は何ら役割を果たしてはならない；論理的構文論は記号の意味が問題になることなく立てられねばならず、諸表現の記述だけを前提しうる。

そして『資本論』の次の一節を、論理的構文論の具体例と見ることができよう。

＜資＞ しかし、[20 エレのリンネル＝1 着の上着 において] 質的に等置された二つの商品は同じ役割を演じるのではない。リンネルの価値だけが表現される。では、どのようにしてか？ リンネルが、その「等価物」としての、またはそれと「交換されうるもの」としての上着に対してもつ関連によって、である。この関係のなかでは、上着は、価値の実存形態として、価値物として、通用する。なぜなら、ただそのようなものとしてのみ、上着はリンネルと同じものだからである。他方では、リンネルそれ自身の価値存在が現われてくる。すなわち、一つの自立的表現を受け取る。なぜなら、ただ価値としてのみ、リンネルは、等価値のものとしての、またはそれと交換しうるものとしての上着と関連しているからである。例えば、酪酸は、蟻酸プロピルとは異なる物体である。しかし、両者は、同じ化学的実体 — 炭酸 (C)、水素 (H) および酸素 (O) から成り立ち、しかも同じ比率の組成、すなわち  $C_4H_8O_2$  で成り立っている。いま酪酸に蟻酸プロピルが等置されるとすれば、この関係のなかでは、第一に、蟻酸プロピルは単に  $C_4H_8O_2$  の実存形態としてのみ通用し、第二に、酪酸もまた  $C_4H_8O_2$  から成り立っていることが述べられるであろう。すなわち、蟻酸プロピルが酪酸に等置されることによって、酪酸の化学的実体が、その物体形態から区別されて、表現されるであろう。(p.85)

「異なる物体」の「関係」をもって経済学的な「価値関係」を説明するのだから、その説明は論理的なもの以外ではないからである。

(2) 本稿で使用するテキストは次である。

『資本論』全13分冊 資本論翻訳委員会 訳 新日本出版社

『大論理学』1～3 寺沢恒信訳 以文社  
なお引用に際し、テキスト間での文字種の統

一はしていない。

(3) 以上略述したことは拙稿「『論理的構文論』によるソシュール『一般言語学講義』読解」において詳しく述べた。

(4) 18パラグラフに対応する『大論理学』の叙述がB版でなくA版であることについて、「論理的構文論」の立場からは特別に述べることはない。強いて言えば、B版の叙述は『資本論』の論理展開は対応しないというのみである。無論実証的には様々なことが説かれようが、論理的構文論はそうしたことを探求の対象としない。

(5) なお『大論理学』に次の一節がある。

＜大＞ [存在と無との合一を破壊する] この[破壊の] 成果は消失してしまっていることであるが、しかし無としてではない；無として消失してしまっているならば、それはただすでに揚棄されてしまった両規定[存在と無]の一方にふたたびおちこむことにすぎない。そうではなくてこの成果は、存在と無との静止した単一態になった統一である。(1 p.114)

(6) 「この形態[一般的価値形態]がはじめて現実的に諸商品を価値として関連させ、諸商品を互いに交換価値として現象させるのである」(p.113) が、「一般的等価物として機能するようになった」金が「商品世界の価値表現におけるこの地位の独占を勝ちとるやいなや、それは貨幣商品となる。」(p.120)

(7) 「商品に内的な、内在的な、交換価値(“固有価値”)というものはひとつの“形容矛盾”に見える。」(p.62)

(8) なおまた「個体の主観的過程」と「客観的総体性に関係している過程」とが「並列している neben」という把握は、属性の論理を理解する上で示唆的であると思う。この点は次注に説いたこととも関連するであろう。

(9) 四肢構造把握の困難は『資本論』の読解に限らない。例えば言語の把握に関しても、次の時枝誠記の言語観などはその例になる。本居宣長の「凡て同じ物も指すさまによりて名のかはる類多し」について、時枝は説いている。

「同じ物」とは素材に対する観察的立場についていつたことであり、「指すさま」とは、その素材に対する主体的立場に於ける把握の仕方をいつたと解すべきである。

語は同一事物に対する把握の仕方の相違を表現することによつて異つた語となるといふ意味である。宣長のいつたことは、その逆にも適用出来ることであつて、指すさまが同じであるならば、異つた事物をも同じ語によつて表現される訳である。……（中略）……疲れた山道で一本の木の枝を折つて、「いゝ杖が出来た」ともいひ得るのである。（『國語學原論』 p.405）

思考（本質）と延長（存在）を切り離すことしか知らない、言語過程説の悟性的な言語観がここには明らかに見てとれよう。考えてみれば、言語過程説は「言語を思想表現の手段と考へる」（同p.22）のであつて、この外的合目的性にとどまったのが言語過程説だと言うこともできる。その理由の一つが、「時枝における聞手は、いわば人形であつて人間ではない。ただ単に聞くだけの聞手は眞の聞手ではない」（森重敏）と評される時枝の主体把握にあったことは間違いない。